

政治学者の

永田町暮らし

櫻田 淳



〈第一〇回〉

「富田メモ」に首相の靖国参拝と、いつもの話題で揺れた永田町の夏。だが、時代は「ポスト小泉」へ。小泉政権が積み残した政策が露わになった夏でもあった

七月二十一日

一九八八年春に当時の富田朝彦宮内庁長官が崩御前年の昭和天皇の発言を控えたとされるメモランダムの中身が報じられた。「富田メモランダム」は、東京裁判A級戦犯の靖国神社合祀に昭和天皇が示した強い不快感を伝えている。無論、このメモランダムの信憑性は後々に検証されるのであろうけれども、筆者には、なかなか凄い話が出てきたという印象がある。それにしても、小泉純一郎総理の「靖国八月十五日参拝決行説」が有力なものとして語られる状況では、このメモランダムの公表も否応なく政治的な意味合いを持つことになるであろう。筆者には、それが芳しいことであるとは思われない。

八月九日

前日、二階俊博経済産業大臣を中心とするグループの政策提言が出されたけれども、各種メディアは、「靖国参

拝に対する言及がない」とか「二階派は安倍氏支持の意向である」とかといった解説を付して報じている。

この政策提言にイデオロギー色がないのも当然であろう。天下の執政を目指した織田信長や徳川家康には、それぞれ「天下布武」や「厭離穢土欣求淨土」といった言葉に醸し出されるイデオロギーがあったかもしれないけれども、伊達政宗や藤堂高虎には、類似のイデオロギーはない。政治家がイデオロギーを語るかは、どのような位置を政権に対して占めるかに依る。此度の二階派の政策提言には、実務に徹した観点から次の政権が進めるべき政策プログラムを示したという意味合いがあらう。

八月十五日

午前、小泉総理が靖国参拝を決行していた。筆者は午前中は寝ていたので、昼前に起床した折に小泉総理の参拝決

行を知った。参拝の様子は、テレビ東京

以外は、在京テレビ局のすべてがリアル・タイムで放映していたようである。こういう話は、二〇秒くらいのスポット・ニュースで触れば済む話である。もともと、筆者は、八月十五日という日付に特別なものを感じていないし、総理大臣の参拝はすべからず春秋例大祭の折を選ぶべきと思っていた。だから、筆者は、小泉総理の執政を総じて肯定してきたとはいえず、此度の「公約実行」に快哉を叫ぶ気はない。「えっ、結局、行ったのか……」と反応するだけである。

明日になれば、この騒動も潮が退くように忘れ去られるのであろう。

八月十六日

早朝、納沙布岬沖で日本漁船がロシア国境警備艇から銃撃を受け、一人が落命したようである。この事件が二四時間早く起こっていたら、昨日の靖国

騒動はなかったであろうと想像する。

日本の戦後の「負債」は、北方領土周辺では人々の「現実の生活」に影響を及ぼしている。

振り返れば、北方領土交渉に関していえば、小泉内閣発足直後に、それまで検討された「二島先行返還」方針が否定され「四島一括返還」方針が確認されて以降、実際の交渉は目立った進展を示していない。小泉内閣下の対外政策の文脈で「何が積み残しにされたか」を示す点では、この事件は象徴的な意味合いを持つものだといえよう。

八月十八日

盆休みの徒然に、オットー・フォン・ビスマルクの評伝『ビスマルク伝』（エーリッヒ・アイク著）を読んでいた。次のような記述が眼に留まった。一八八〇年代半ば、アルフォン・ス・クールセル（ベルリン駐在フランス大使）がジュール・フェリ（フランス

首相）に宛てた私信の一節である。

「ドイツとの友好関係は、ドイツの利益にひれ伏した屈伏の形を取らないときは、嵐に翻弄される友好関係です」

往時、独仏関係は「相互不信」の関係であった。現在の日中関係の難しさは、日中両国が互いに「相手の利益にひれ伏した屈伏の形を取らないときは、嵐に翻弄される関係」と日中関係を認識し合っていることにあるのであろう。おそらくは、日中両国が互いに受け容れられる「利益」は何かというところから問題を設定し直さなければ、日中関係の現状を打開することは、率直に言って難しいであろう。これもまた、「小泉以後」に委ねられた課題なのである。

イラスト◎浅妻健司

さくらだじゅん 政治学者・東洋学園大学兼任講師